

先輩に続け

埋蔵文化財発掘 調査員として働き始める

発掘調査員という仕事との出会い

私は大学・大学院で専攻した考古学という専門分野を活かし、現在市役所で埋蔵文化財の発掘調査員として働いています。仕事内容は、主に管内にある遺跡について、開発事業等にもなる発掘調査をすることが中心です。私は他大学で考古学を専攻している学生よりは現場での発掘調査に参加するのが遅く、大学院在学中に初めて参加しました。発掘現場を経験するまでは、正直なところ、埋蔵文化財関係以外の仕事に就くことを目指していました。というのも、埋蔵文化財の専門職員として就職することはかなり困難なことで、多くの先輩方が大学院修了後は非正規職員としていろいろな職場を渡り歩いていて、不安定な雇用体系のために苦労が多いという話を学

部生時代からよく耳にしていたからです。しかし、実際に発掘現場に出ているなかで、非正規雇用からのスタートでも、自分の現場を持てるようになりたいという思いが強くなり、専門職を目指すようになりまし。

総合科学部出身者として

普段仕事をしているなかで、「文学部ご出身ですか?」と聞かれることがよくあります。徳島大学の「総合科学部」で考古学などの一般的な大学の文学部で学ぶような分野を専攻できるということは、あまり知られていないようです。

総合科学部で考古学を専攻するなかで最も悩んだのが、「総合的」なカリキュラムのため、専門分野に割く時間が他大学の文学部など



吉野川市教育委員会
生涯学習課文化振興係
嘱託職員(埋蔵文化財発掘調査員)
井形 玲美 (い か た れ み)

と比較すると少ないということですが。私の場合は考古学関連科目のほかに、語学・理系科目や、就職活動関連のような科目も必修科目として多くありました。このような環境の中で専門分野を深めるために、学部生時代から休日を利用して研究会などに積極的に参加するように心がけていました。そのときに出会った方々には、現在においても調査にあたってのアドバイス等いただくことが多くあり、発掘調査員として働く中で重要な存在となっています。

また、考古学以外の科目を履修したことも、今の仕事に役立っています。とくに、行政の職員として働くにあたっては、埋蔵文化財以外の業務をすることも求められ、そのような環境のなかでは地域経済や公害問題、動植物との共生などの問題について考える機会が多

くあります。総合科学部ではそれらの基礎的な部分について学ぶ機会があつたため、問題に対しての理解がより深いものになっていてと思います。

総合科学部の「文理問わず、幅広い分野を総合的に学べる」という特徴は、学生のみならず一人ひとりの姿勢によって良くも悪くもなり得るものだと思います。恩師が「共通科目をおろそかにするな。各共通科目の基礎だけでもしっかりと身につけていけば、それは必ず将来仕事の中で生きてくる。」とよく仰っていました。当時はあまりその言葉の重みを理解できていませんでしたが、現在ではまさにその言葉の通りだと思えますし、その言葉を信じてよかつたと心から思います。



海外 体験記

この夏参加させて頂いたテキサス大学サマーリサーチプログラムでの体験について報告させて頂きます。

テキサス大学 (The University of Texas Health Science Center at Houston) はTEXAS MEDICAL CENTERとさう世界最大規模の医療研究機関集積部を構成する一つです。TEXAS MEDICAL CENTERは町全体が医療施設とらった様子で、見渡せる限りのビルや建物のほとんどが病院や医療系の研究施設や大学というものでした。

プログラムの参加者は、テキサス大学の最先端の施設で、希望する研究室に配属され、実際に研究活動を行い、その手法などを学ぶことが出来ます。

私はIntegrative Biology and Pharmacologyという分野の研究室内で8週間研究活動を行いました。この研究室は基礎系の研究を行っており、テーマはribosome biogenesisというものでした。ribosomeはタンパク合成

テキサス大学サマーリサーチ プログラムに参加して

医学部 医学科 5年
宮原 圭吾 (みや は ら けいご)



に関する主要な器官です。癌細胞のように急速に増殖する細胞では、ribosomeが効率的に合成されています。複数のoncogeneがribosomeの合成を制御していることや、癌細胞でその合成が活発になっていることが明らかにされ

ており、ribosome biogenesisを分子レベルでのメカニズムで説明することが、新しい癌治療の発展につながるかと期待されています。

私は、ribosomeが生成される過程で役割を果たすタンパク質について、化学修飾やタンパク質間のinteractionについての研究を行いました。研究室では、私だけの研究内容が課され、その実験については責任を持って行うことを求められました。コミュニケーションは全て英語でした。メンターから手技の指導や実験の説明を受け

るときや、私ができるように実験を進めるかをプレゼンする際などは当初強い緊張を強いられました。特に、最初にメンターから実験内容などをレクチャーして頂いた時は、断片的にしか理解できませんでした。その後、論文などを読み、実際に実験を進める中で理解が深まると徐々に聴き取ることに神経をつかわずに済むようになっていきました。それでも、化学式を見れば一発で分かる物質の名前を聞き取れず何度も聞き返してしまったり、自分の考えをスムーズに伝えられず歯がゆい思いをしたりしました。

このたびの留学を通して、海外で研究活動を行うという経験のほかに、自分と共通のバックグラウンドを持たない人たちとの交流や自分がマイノリティな存在になるといった、日本では得がたい経験を積むことが出来ました。最後になりましたが、留学するにあたりお世話になりました皆様に厚く御礼申し上げます。

